

マネジャの為の TRIZ

山口 和也 (MOST 合同会社)

概要

2000 年以降 TRIZ の活動は徐々に拡大の途上にあるが、その拡大の動きは緩やかである。TRIZ の有効性が極めて大きなものであると言う認識からすると、その乖離は極めて大きいと考えている。その大きな要因は、TRIZ を、技術者が使う「発明的課題解決」の単なるツールとしての活用に留め、実務者、マネジャ及び会社上層幹部迄を含んだ人々が、企業の組織的活動に欠くべからずものとして、認知していない事によると考える。

又、時代の変遷から考え、大方の会社上層幹部は TRIZ の様な素晴らしいツールに出会うことなく、ねじり鉢巻で頑張り、成果を上げてきた人が殆どであるのが普通である。よってマネジメント時には、TRIZ とかの考えは毛頭なく、ねじり鉢巻のスタイルで頑張る事が成果を上げる基本であると固く信じている。この実態をマネジャは良く認識し且つ企業内での自分のマネジャとして役割を明確にして、現状を打破するアクティブな行動をする事が求められていると考える。そのためにはマネジャとして TRIZ をどのように捉え、上層幹部や部下を納得させ、TRIZ を使う環境を作っていくかが重要である。これらの事を筆者の経験をとおしてマネジメントとして役に立つ「マネジャの為の TRIZ」として QFD や品質工学との連携活用を含め提起する。

内容説明

- ① 企業における開発現場の実態
- ② 開発現場の現状を打開する方法
- ③ 日本経営品質賞で謳われる独自能力をどのように考えるか
- ④ 独自能力を伸ばす為のマネジャの役割
- ⑤ マネジャとしての TRIZ の捉え方
- ⑥ 開発環境の整備と部下の教育
- ⑦ TRIZ の活用活動を活発化するための条件
- ⑧ 纏め